

# R

KANSAI  
UNIVERSITY  
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

# reed

No. **55**

December, 2018

関西大学ニュースレター

発行日：2018年(平成30年)12月5日  
発行：関西大学 総合企画室広報課  
大阪府吹田市山手町3-3-35  
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121  
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

## 月に0冊でいいのか、 大学生の読書

■対談 松尾 英介 丸善雄松堂株式会社代表取締役社長 / 芝井 敬司 学長  
読書の愉しみ、広がる世界

### ■リーダーズ・ナウ ー5

在学生ー法学部2年次生 植原 啓貴 さん  
卒業生ー福井大学 国際地域学部 准教授 生駒 俊英 さん

### ■研究最前線

現代社会における美容整形の実態を研究  
美容整形とコミュニケーションの関連性に迫る ー7  
総合情報学部 ー 谷本 奈穂 教授  
太陽光エネルギーの有効利用技術の設計  
太陽光で水と酸素から過酸化水素を製造 ー9  
環境都市工学部 ー 福 康二郎 助教

### ■トピックス【学内情報】 ー11

文部科学省「大学の世界展開力強化事業(タイプB)」に全国で唯一採択  
COIL型教育を活用した交流プログラムの構築を支援する  
「グローバル教育イノベーション推進機構(IIGE)」を開設 ほか

### ■社会貢献・連携事業 ー13

関西大学独自の起業資金支援制度を設立  
りそな銀行と提携し、学生の起業資金を援助する ほか

### ■関大ニュース ー15

武庫川女子大学と包括連携協定を締結 ほか

ELISUKU  
MAISUKE



●読書の楽しみ、広がる世界

# 月に0冊でもいいのか、 大学生の読書

松尾 英介・丸善雄松堂株式会社代表取締役社長 × 芝井 敬司・学長



2016年2月、丸善株式会社と株式会社雄松堂書店が経営統合し、新たなスタートを切った丸善雄松堂株式会社。書籍販売を始め、学術情報・知的空間を創造し、人がより良く生きるための「知」を提供し続けている。そのトップを務める松尾英介社長と芝井敬司学長が、幼き日の本との出会いから、現在に至る読書の思い出、読書の効能、本が持つ力について語り合った。

## ◆本との出会い、読書が育んだ今の私

**芝井** 子どもの頃は、どのような本をお読みになりましたか？  
**松尾** 記憶にある最初の本は、厚さ1センチぐらいの絵入りの世界名作シリーズですね。母によると、本を与えると、ずっと読んでいたそうです。その後、内外の偉人伝なども読み始め、当時創刊された少年漫画雑誌にも熱中しました。  
 中学・高校時代は、受験やクラブ活動中心であり読書はしていませんでした。ただ鉄道が好きだったから、時刻表は愛読(?)していました。あれは眺めているだけで、楽しくなるんです。芝井先生の読書の原点は？  
**芝井** そうですね、小学4年の時に百科事典を愛読するようになったことを記憶しています。学校で習うことの大半をその百科事典

で予習しました。あとは、小学校の図書室で『宇宙船ビーグル号の冒険』などのサイエンス・フィクション、怪盗ルパンやシャーロック・ホームズを始め、神話や歴史物に関するものも手にしたことを覚えています。  
 1学年上の兄がいて、その兄への対抗心からか、兄が吉川英治の『三国志』、『宮本武蔵』を読むと、私も読むという感じで競い合っていました。  
 高校卒業直前に、国語の先生がおすすめの100冊を紹介してくださいました。私はその100冊を大学1年の夏休みが終わるまでに読み終わりました。その100冊の中には三浦綾子の『塩狩峠』、有吉佐和子の『華岡青洲の妻』のような小説から、中根千枝の『タテ社会の人間関係』、ルース・ベネディクトの『菊と刀』のような堅いもの、梅原猛の『水底の歌』まで網羅され、今でも私の中に残っているものばかりです。

## ◆人を動かす。社長と学長の読書術

**松尾** 私が大学生だった1970年代は日本の経営が世界的に注目を集めていました。経営学者J.C. アベグレンが、日本の経営の特徴として「終身雇用制」「年功序列」「企業内組合」の3点を指摘した『日本の経営』を読んで以降、日本の経営に関する本を追いかけ

て、卒業論文もオイルショックを経て大きく変化する中で「日本の経営の将来」をテーマに書きました。  
 なぜ日本の会社はこのような経営の特徴を持つようになったのかという疑問から、日本人はどんな特性をもっているのかということに関心が広がり、先ほど挙げられた『菊と刀』や『タテ社会の人間関係』なども読みました。一方趣味という面では歴史物、特に戦国時代や幕末・明治が好きで、武田信玄・真田幸村などの周辺についてはかなりマニアックに読んでいました。  
 社会人になってからは、経営管理、経営企画などの部署を歩いてきたので、仕事上、否応なしに勉強せざるを得ず、経営戦略、マネジメント、リーダーシップに関するものを読みました。有名なものでは、ドラッカーやジム・コリンズの『ビジョナリーカンパニー』、G.ハメルの『コア・コンピタンス経営』など。  
 仕事を始めて、企業小説やノンフィクションの面白さを感じるようになりました。自分と重ねて共感する個所が出てくるんですね。かつてM&Aに携わったこともあって、その関連のノンフィクションは結構読みました。なかでも、A.R.ソーキンの『リーマン・ショック・コンフィデンシャル』は緊迫した状況の中で、大きな決断を迫られる企業家の姿がリアルに描かれていて面白かったです。

**芝井** 私も読みました。リーマン・ショックは私たちが生きている時代に起きた大きな金融ショックでした。当時は100年に1度の大きな事件になるかもしれない。ある種のカタストロフィのにおいがしました。あれはいったい何だったのか、歴史を専門とする私にとっては興味深いところ。だから、リーマン・ショック後の危機対応にあたった、アメリカの財務長官ポールソンやニューヨーク連邦準備銀行総裁ガイトナーの回顧録も読みました。  
**松尾** 意外な共通の本がありましたね。  
**芝井** 文学部長に着任してから、私はリーダー論なども読むようになりました。それ以前はあまり手が出る領域ではありませんでした。しかし、組織の中で人を動かすことにかかわらざるを得ない立場になると、自分の感覚と経験だけでは対応できず、本に知識を求めざるを得ない。リーダー論がどのように論じられて、どこが勘どころかを知っておきたかったのです。印象に残っているのは金井壽宏さんの『リーダーシップ入門』ですね。  
**松尾** 私も金井さんの本は読みました。  
**芝井** 三枝匡さんの3冊の経営論シリーズも読みました。人が組織に入って何ができるかなどについては、なるほどと思うことがありました。  
**松尾** 小説形式になっているから面白く読めますよね。企業経営に関する本では、マイケル・ポーターの『競争優位の戦略』が、これは読書の対象とはいえませんが、競争戦略の理論的・体系的著書として有名です。気軽に読める企業小説では、これは大学時代からですが、城山三郎の著作をたくさん読みました。  
**芝井** 私も好きな作家ですよ。洪沢栄一を描いた『雄気堂々』が面白かった。  
**松尾** そうですね。石田禮助を書いた作品はお読みになりました？『粗にして野だが卑ではない』。私が社員に言い続けている言葉です。卑でない堂々とした仕事をやっていこうと。

## ◆小説も評論も数学も科学も、尽きない好奇心

**松尾** 私は週2、3回丸の内や日本橋にある丸善に行って本探しをするのですが、今日はこの1年ぐらいで読んだ本の中で、面白かったものを数点持参しました。ビル・エモット『「西洋」の終わり』、内田洋子『モンテレージョ 小さな村の旅する本屋の物語』、見城徹『読書という荒野』、木村泰司『西洋美術史』、辻村深月『かがみの孤城』、佐藤勝彦『「量子論」を楽しむ本』、カズオ・イシグロ『日の名残り』……。エリック・リース『スタートアップ・ウェイ』、





■対談



知と学びにかかわる新たな商品・サービスを扱う事業を創造し、大学をはじめとしたお客様の課題に対するソリューションを提供していかないとはいけません。

これは起業の話ですが、当社のような歴史の長い企業でも、継続的に新しい事業を生み出していかなければなりません。その点では学ぶべきものがあると思ひ、手に取りました。

**芝井** 興味深いリストですね。本学も重要なテーマの1つとして取り組んでいるのがスタートアップです。本学の梅田キャンパス2階には、起業やその支援に関心のある者同士が出会い、交流する場「START UP CAFE」を設置し、少しずつではありますが実を結んでいます。

**松尾** 理系の本もお読みになりますか？

**芝井** 特に分野を問わず幅広く読みます。今年は貴社にもご協力いただきながら、「新入生に贈る100冊」を選びました。その中に、私は『ビューティフル・マインド』と『素数の音楽』の2点の理系の本を盛り込みました。『ビューティフル・マインド』は、ナッシュという数学者が若い時に才能を発揮しながらも、一時は精神的に悩み、最終的にノーベル経済学賞を受賞する話で、これはとても心に残っています。

◆本がある場所を持つ、心動かす力

**松尾** 残念ながら、出版市場は長い間縮小傾向にあり、ピーク時の半分に近い、約1兆4,000億円となっています。一方で、電子

書籍市場は既に約2,500億円まで拡大しています。今の学生はタブレットで電子書籍を読むことに違和感がないようですね。

実は私も、小説は結構電子書籍で読んでいまして、三浦綾子作品は先ほど挙げられた『塩狩峠』を含めて40冊くらい読みました。

**芝井** 貴社にもご協力いただき、今年度、本学の図書館で4万タイトルの電子書籍を無料で読めるサービスを提供しましたが、学生が大学にいない夏休み期間も含めて、アクセス数は月平均約3,000件にも達しました。

**松尾** 電子書籍の利用拡大と市場の紙離れは顕著ですが、一方で紙の本が持つ力は相変わらず大きいと私は感じています。

そこで、読書体験の効用をさまざまな場面で活用しようと、当社では「本のある場づくり」を行う、BOOQ(ブック)と言うサービス事業を新たに展開しています。

この事業は店舗や施設に合わせて、機能的、情緒的、社会的に価値を高めることを目的に、本を選び、良質な空間を創り出すお手伝いをするものです。例えば、地域の特産品と本を並べて陳列することもあります。商品だけの訴求力ではなく、それに本というものをかけ合わせることで、その地域への好奇心を刺激し、両者の購買を促進することができるでしょう。Book Caféもいろいろな形で展開され、空間デザインから什器・選書・運営まで携わっています

また、埼玉県桶川市では、市民のための知の空間をつくりたいという自治体のニーズに応じて、駅前建物に地域の文化、交流の拠点として開設された「OKEGAWA hon プラス+」の全体デザインを請け負いました。ここは、図書館、当社書店、カフェ、イベントスペースから構成され、当社はイベントの運営も担当しています。地域の大学、博物館などの協力を得て、大学生が課外活動の発表を始め、子供向けの科学教室、市民向けのワークショップなどを継続的に実施しています。このようなニーズは各地にあるのではないかと考えています。

**芝井** 本の背表紙が整然と並んでいるのを目の当たりにすると多くの人が心を動かされます。有名な図書館は必ず人々を圧倒するような大規模な展示の方法を取っています。例えば、大英図書館の旧図書室は、大きなドーム天井の巨大な円形の部屋にもものすごいボリュームで本が存在していることを強調していました。それは圧巻としか言いようがありません。単に本が並んでいるのではなく、これこそが人類の文化であると誇示しているようなところがあります。それは紙の本がある場所だけが持つ、ある種の力なのかなと感じます。

◆学生は無理してでも本を読んでほしい

**芝井** 本を読むことはやはり文化的な力だと思ひます。本なんて読まなくていいじゃないかという声もあるかもしれない。しかし、それではこれまで人間が育んできた文化が次世代にきちんと継承されない。だから、学生にはぜひ無理してでも本を読んでほしい。読み進めるうちに必ず楽しいものに会えるものです。

アメリカの大学は学生たちに半ば強制的に本を読ませる形で授業をします。学生たちは年間100冊程度の本を読むこととなります。これを4年間続けると400冊。一方、日本の学生は53.1%が1カ月

の読書量ゼロという調査結果(全国大学生生活協同組合連合会調査による)があります。これでは、日本の大学がきちんとした教育をしていますと言っても世界には通用しません。学生はしっかりと本を読んで本気で勉強しないと世界で通用する能力が身につけません。

**松尾** 何から読んだらいいかわからないから、お薦めの本を教えてくださいという学生が少なからずいるのではないのでしょうか？

**芝井** そうかもしれません。だから、おせっかいかもしれませんが、学生の活字離れが叫ばれる今、やはり「面白い本がいろいろあるよ」というメッセージを出さないとはいけません。「新入生に贈る100冊」はそこから生まれた企画でした。貴社にはご協力いただきまして本当にありがとうございました。今後も、いろいろとお力添えください。

**松尾** もちろんです。丸善創業者の早矢仕有明が「丸屋商社之記」という文章を残しています。それを読むと、当時、西洋に関心を持ち、新しいものをどんどん取り入れ、国内に文化を広めようとするパイオニア精神が非常に強かったことが分かります。

2019年、当社はその前身である丸善株式会社の創立から150周年を迎えます。本の販売が大切な事業の1つであることは変わりませんが、今は、もう新しい文物を輸入する商売の時代ではなくなっています。ですから本の販売に加えて、電子書籍、選書サービス、本のある場所づくりなど、知と学びにかかわる新たな商品・サービスを扱う事業を創造し、大学をはじめとしたお客様の課題に対するソリューションを提供していかないとはいけません。それが、創業時からのパイオニア精神を発揮した、これからの挑戦だと思っています。

本なんて読まなくていいじゃないかという声もあるかもしれない。しかし、それではこれまで人間が育んできた文化が次世代にきちんと継承されない。



**松尾 英介**(まつお えいすけ)  
丸善雄松堂代表取締役社長 1953年東京生まれ。76年慶応義塾大学経済学部卒。同年、大日本印刷株式会社入社。2005年同社事業企画推進室長、08年丸善(現丸善雄松堂)常務取締役管理本部長、10年CHIグループ(現丸善CHIホールディングス)取締役を兼務、12年より丸善(現丸善雄松堂)代表取締役社長。丸善ジュンク堂書店取締役、関西図書館流通センター取締役(11年～)、丸善出版取締役(11年～)、丸善CHIホールディングス専務取締役(13年～)も現在務める。

**芝井 敬司**(しばい けいじ)  
1956年大阪生まれ。78年京都大学文学部卒。81年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。84年関西大学に着任し、専任講師、助教授を経て、94年文学部教授。文学部長、副学長を歴任し、2016年10月に学長に就任。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事。主な共著に「新しい史学概論」IEUと日本語「あかねさす」国際交流」など。



## 一歩踏み出して見えた “鮮明な将来像”

### カンボジア起業体験プログラム

◎法学部 2年次生  
植原 啓貴 さん

梅田キャンパス“KANDAI Me RISE”が起業・創業を目指す学生や社会人を支援する「カンボジア起業体験プログラム」。「何かに挑戦したい」という漠然とした思いを抱いたまま二十歳を迎えた学生が、アルバイトでためた“虎の子”を投資して挑んだ。初の海外挑戦で得た“鮮明な将来像”とは。

「新しい“コト”に挑戦してみたい!」「初めの一歩がなかなか踏み出せない!」。梅田キャンパス“KANDAI Me RISE”が、起業・創業を目指す学生や社会人を支援する「カンボジア起業体験プロジェクト」に、法学部2年次生の植原さんが挑んだ。日本から約4,000キロ、東南アジアのインドシナ半島に位置する人口約1,600万人の王国が舞台だ。「漠然と留学とインターンシップを経験したい」と思っていました。このプログラムを学内の掲示で目にして

から、夏休みが近づくとつれて両方経験出来るチャンスは他にはないと参加を決めました。

いつも3歳上の兄の背中を追いつけてきたという植原さん。アルバイトでコーチをするほどのテニスやピアノ、そして法学部に進学したのも兄の影響が大きかった。大学入学後、「何かに挑戦したい」との思いとは裏腹に過ぎていく単調な日々を決別すべく、一歩を踏み出した。「自分で稼いだお金で参加することに意義があると思いました。初挑戦の海外で、今の自分の力を試すため、友人を誘わずに参加しました」と振り返る。

カンボジアで市場調査から、企画、現地スタッフの雇用、販売管理まで行うプログラム。渡航前には、カンボジアの現状の講義を受け、求人票の作成など準備を進めた。研修生受け入れのため

植原 啓貴—うえはら ひろき  
■1998年、大阪府出身。大阪府立箕面高等学校卒業。法学部2年次生。最近の関心事は限界集落の問題や地方創生。特技はテニス、ピアノ。趣味は映画鑑賞。

# LEADERS NOW!



に作られた首都プノンペンのレストラン「サムライカレー」を拠点に、18人の参加者が2班に分かれて、プログラムは幕開けた。植原さんの班のメニューは“たこ焼き”と“焼き鳥”に決定。「コストパフォーマンスが良いたこ焼きと焼き鳥でスタートしましたが、たこ焼きはあきらめざるを得ませんでした」と植原さん。大阪のソウルフード“たこ焼き”は、事前調査の結果、「なじみがなく、見た目でも敬遠されてしまいました」と断念。その後は類似メニューの現地価格、販売会場の立地や客層、好まれる味付け、SNSによるPRを調査。ターゲットを設定するペルソナ分析から、製品開発成功の鍵を握る4P(Product, Price, Place, Promotion)と3C(Customer, Company, Competitor)分析に着手した。

商品の可視化とその鮮度を保つために、それまでの白いバックから透明に替えるアイデアを提案するなど、植原さんはチームの企画担当としての才能を発揮。「メンバーとともに王立プノンペン大学で価格、味付けや見た目、そして現地スタッフの見極めなどを調査し、本番に備えました」。日本語学科の男子学生2人を通訳スタッフとして、そして女子学生1人を調理販売スタッフとして雇った。「日本語を話せる男子学生のおかげで現場もスムーズに、また女子学生の笑顔あふれる対応で活気づきましたね」。商品開発、マーケティング、ペルソナ分析、スタッフ雇用……。植原さんの班は規定の原価率をクリアしつつ、終盤2日間に開催されたコンテナマーケットで目標額の150万円を大幅に上回る267万円を売り上げる大成功で幕を閉じた。



▲コンテナマーケットでの販売

「言語、文化、食生活の違いなど、日本と海外の違いを肌で体感しました。将来への課題も見つかりましたが、それ以上に収穫もありました。現地で本学OBの会社経営者の話を聞く機会があり、多くの経験談を聞く中で、『実践的な英語を学ぶならディベート力も身に付くMBA(経営学修士)の取得がベスト』とアドバイスをいただきました。そのためにも1日も無駄にしないように、積極的に梅田キャンパス主催のイベントに参加したり、ネイティブの英語が飛び交うアルバイト先も探します。ブレることなく芯を貫きたいですね」と目を輝かせた。アルバイトでためた“虎の子”を費やして挑戦した初の海外。二十歳の夏を境に、それまで兄の背中を追っていた植原さんの視線の先には、自身の鮮明な将来像があった。

## 法学の追究と 地方創生に取り組む

母校とのつながりを大切にしながら、  
かかわることすべてに全力で挑む

◎福井大学 国際地域学部 准教授  
生駒 俊英 さん  
—法学研究科博士課程前期課程 2005年修了—

大学教員として「法律学」「民法学」「家族法」を専門にする生駒さん。法律の専門家として家族法を研究しながら、アイススケート部での主将経験と人脈を生かして、“地方創生”にも挑んでいる。



「ワンステップ憲法」(雄嶺野書院 2015年)



JR福井駅隣接のえちぜん鉄道に乗り約10分、福大前西福井駅を降りると、眼前に福井大学文京キャンパスが広がる。ここが、国際地域学部の准教授として主に「法律学」「民法学」「家族法」を研究する傍ら、母校とのパイプを生かし、地域活性化にも取り組む生駒さんの活動拠点だ。「世界に通用する人材、地方創生として地域に資するような人材を育成してほしいとの地元企業の声から、国際地域学部は2016年4月に発足しました」と、研究室の窓からキャンパスを眺めながら穏やかな表情を浮かべた。

法律学を専門とする大学教員の父と、書道家の母の下、大阪で生まれ育った。幼少期は野球やサッカーなどのメジャー競技に夢中になったが、思春期に「自分はあまのじゃく気質かもしれない。人が選ばないことをしてみたい」と思うようになったと言う。中学では、「夏は暑い、冬は寒く、練習が厳しい。選ぶ人が少ないだろう」という思いから剣道部に入部し、副将を務めた。部活制限のある高校時代を過ごした反動から、「大学では絶対に体育会に入部する」と決意していた。大学の入学式後に偶然手にしたクラブの勧誘チラシの中から、「初回滑走料無料」のうたい文句に引かれ、アイススケートは初心者だったにもかかわらず、当時は大学内でも注目度が低かった体育会アイススケート部の門をたたいた。

「高校時代に流行したローラーホッケーで遊んでいたおかげで、フィギュアスケートにもすんなり入れました。当時のアイススケート部は大学内でもあまり存在が知られていませんでしたので、私のあまのじゃく気質がここでも働きました」と生駒さん。1年次生の新人戦での優勝を皮切りに、関西インカレB級も優勝するなど存在感を示し、3年次生から主将を任されるまでに。その後、高橋大輔選手や織田信成選手が入部するようになり、「世界で活躍する選手が入ることでもうまく調和され、部にも良い刺激になったと思います」と当時を振り返った。



生駒 俊英—いこま としひで  
■1980年大阪府生まれ。愛知産業大学三河高等学校卒。2003年関西大学法学部卒。05年法学研究科博士課程前期課程修了。08年法学研究科博士課程後期課程所定単位修得後退学。関西大学非常勤講師、岡山吉備国際大学での勤務を経て、2010年から福井大学に着任。在学中は体育会アイススケート部に所属し主将を務めた。趣味はサウナ。好きな食べ物はうどん。



研究室の壁には大好きな映画「Back to the Future」のポスターが貼られている

その後、高橋大輔選手や織田信成選手が入部するようになり、「世界で活躍する選手が入ることでもうまく調和され、部にも良い刺激になったと思います」と当時を振り返った。

3年次生で学問の奥深さに触れた。師と仰ぐ國府剛教授の「家族法」を研究するゼミで、「少数派の学説もしっかりと読みなさい。物事を批判的な視点でとらえることが大切」と先生から教わりました。表面上の勉強ではなく、1つの問題を深掘りすることが法律学には必要だと学びました。博士課程修了後は関西大学の非常勤講師として教員の道を歩み、岡山吉備国際大学を経て現職に。弱者保護を大きなテーマとして、「離婚における子どもへの影響」などの家族にかかわる法律を中心に研究し、毎週月曜日は母校関西大学で「民法詳論2(家族法)」を教えている。「母校で後輩たちに教えられることは一番幸せですね」と生駒さんはほほ笑んだ。

さらに、JR福井駅前の商業施設ハピリン内に2016年から毎年冬季限定でオープンするスケートリンク「すまいるスケート・ハピリンク」で、ちびっ子スケート教室の講師を担う。また、ハピリンクのイベントでは関西大学のアイススケート部を招き、地元を盛り上げる一役に貢献している。生駒さんの座右の銘「何事も一生懸命に」をモットーに、今後も法律学を追究しながら、地方創生にも取り組んでいく。



(左上) 関西大学アイススケート部によるアイスショー  
(左下) 子どもに指導する生駒さん  
(右) スケート教室の子どもたちに修了書を授与



研究最前線



自己満足と社会的抑圧

—先生は近年、身近になりつつある美容整形に着目し、著書『美容整形というコミュニケーション—社会規範と自己満足を超えて』（花伝社 2018年）を出版されました。先行研究とは異なる視点からの研究ですね。

私はいわゆる女性文化に関心があり、美容整形に関する研究調査も、女性文化の傾向や女性の心理状態を探ることを目的に行っています。これまで、美容整形は「劣等感の克服」や「他者に対するアピール」のために行われると説明されてきました。しかし、2003年から約10年間、断続的に20～60歳の男女合計4,225人へアンケート、そして合計32人の美容整形経験者と医師に対するインタビューを実施したところ、美容整形や美容医療を希望する人が語る理由の多くは「自己満足」「自己の心地よさのため」であり、必ずしも「劣等感」という理由だけで説明できるものではないことが見えてきました。

また、美容整形を希望する人は、「自己満足」を最も重視しながら、同時に「他者」による外見の評価を気にしていることも明らかになりました。先行研究では、この他者を「異性」や「社会」であると指定しており、「具体的に誰なのか」は見落とされてきています。そこで「具体的な他者」を明らかにしたのが、この度の研究調査です。

現代社会における美容整形の実態を研究

美容整形とコミュニケーションの関連性に迫る

美容整形を実践する理由と契機とは

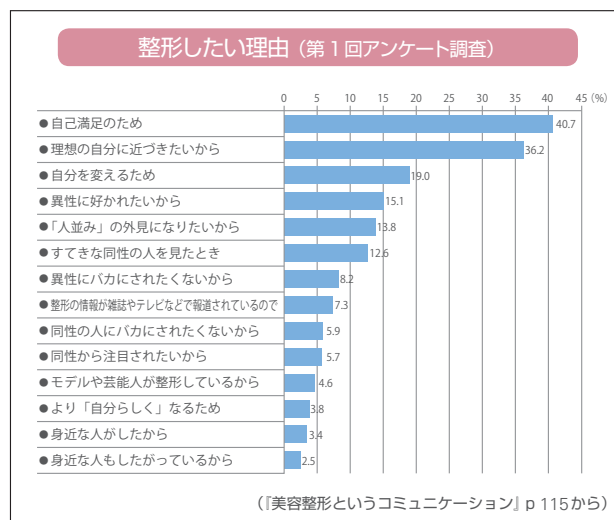
◎総合情報学部

谷本 奈穂 教授

人はなぜ美容整形をするのか？ 技術の発展とともに、女性たちに広がってきた美容整形。彼女たちはどのような美意識を持ち、何に背中を押されて身体加工を行うのか？ 女性文化から社会を考察する谷本奈穂教授は、彼女たちが実践の理由として口に「自己満足」をひもとくとともに、実践の契機には身近な女性同士の「日常的なコミュニケーション」が大きく関連するとして、その実態を探る。



◀谷本教授の著書  
『美容整形というコミュニケーション—社会規範と自己満足を超えて』（花伝社 2018年）  
『美容整形と化粧の社会学—プラスチックな身体』（新曜社 2008年）



Plastic Surgery & Communication

—美容整形を実践する理由として「自己満足」が増えてきたのはなぜでしょう？

もちろん、コンプレックスがあって美容整形を実践する人もいます。けれど、「劣等感の克服」や「他者に対するアピール」も、一見それらとは異なる「自己満足」もまた、動機を示す言葉。実際は、外見によって辛い思いをしたことがなくても「もっと良くなりたいたい」という理由で踏み切る人も多いのです。アンケートでは、外見に自信のある人の方が、自信のない人よりも美容整形を希望しているという結果が出ています。外見に自信があっても「さらに良くなりたい」という願望から、「自己満足」という理由が採用されると考えます。

一方で、彼女たちが本当に「自己満足」で自由に美容整形をしているかという点、それは言い過ぎです。例えば、二重まぶたが良いというのは彼女たちが決めたことではありません。一重まぶたを二重まぶたにする手術はあってもその逆はありません。彼女たちは自らの心地よさを求め、自らの意思で実践しているけれど、目指すべき外見の基準は社会によって構築された一律な価値観に従っているのです。そうした2つの側面があることは、美容整形への意識を研究する上でとても大事です。

実践する契機としての、他者とのつながり

—美容整形へ踏み切るには少なからず勇気がいると思いますが、そこに「他者」の影響がある？

実践する人たちの契機には複合性があります。契機は、「自己満足」という動機と併存しながら、日常的な何気ない会話やコミュニケーションの中で具体的な「誰か」によって生み出されています。アンケートとインタビューから浮き彫りになってきたその「誰か」とは、「同性の友人」「母」「姉妹」。つまり、身近な同性です。自分がやって良かったからと連れて行ってあげたり、悩んでいる人にお勧めしたり。「友達が二重まぶたにして、自分もやりたいな」という気持ちが強くなったのかも「一人だったら勇気は出なかったと思う。妹と一緒にだったのと、お母さんの強い押し(笑)」というように、美がお互いに達成され、分かち合う資源になっており、同性同士のいたわり合いや思いやり、親密性が深く関係しているのです。そのため、全体の傾向から見ると、同性同士のつながりが濃い人の方が実践している傾向にあります。

—エステや美容院へ行く時に近い気軽さを感じられますね。実践する人も相当数増えてきているのでは？

その背景には、美容医療機器と技術の急速な発展も関連しています。「整形」で雑誌記事検索をすると、1960～70年代にはほとんど見当たらず、90年代でその数は跳ね上がります。アメリカからレーザーなどを使う先端技術が導入され、プチ整形という言葉がメディアに登場したのはこのころです。日本人はアメリカ人と違い、美容整形に大きな変化を求めません。メスを入れるよりもレーザーや注射、投薬を好む傾向があり、時間の経過とともにシワが戻るというような「ちょっとだけ」の整形は受け入れやすかったのでしょうか。

そして、今や日本はアメリカ、韓国に次ぐ美容整形先進国。今年初めて日本外科学会が統計を取り、外科手術を含めた施術数は

年間200万件にも上ることが明らかになりました。病院からのアンケート回収率が低いと、実際はもっと多いと推測できます。

SNSの普及に伴う危険性

—技術が発展したとはいえ、リスクもあると思われます。

もちろんです。美容整形は魔法ではなく、施術する医師もすべてが良心的とは言いきれません。また、今年6月に医療広告ガイドラインが施行され、美容整形のビフォーアフターの写真等が掲載できなくなったことにも私は危機感を抱いています。今はSNSにどんどん情報があげられる時代。実際、美容整形の専用アカウントもあり、写真や経験談もたくさん出ています。行政が病院の広告を規制したところで、虚実の分かりづらいSNSの情報は規制の対象にはされず野放しの状態。SNSは女性同士のコミュニケーションや支え合いの場にもなっており、口コミ情報には良い面もありますが、真偽を見分けるのは自己の責任とされます。美容整形を希望する人はきちんと調べ、信頼できる医師と相談して進めなくてはなりません。

—今後の展望をお聞かせください。

今回の研究結果が日本独自のものなのか、海外でも類似した状況なのか、今後は国際比較に力を入れていく予定です。また、これまでは広告や雑誌等のメディアを主体に研究してきましたが、美容整形に限らず、これからの美容業界に影響を与えるのは恐らくSNSです。女性同士の情報交換もこれまでの対面からSNSへと移行していくと考えられ、調査対象として避けては通れないと思っています。

私のゼミではポピュラーカルチャーを扱っており、漫画やファッション、スポーツ等に関心を持つ学生が集まっています。一見するとたわいないこうした文化現象は、学問領域の中では軽視されがちです。しかし、ポピュラーカルチャーは社会や人間と深く関わっていて、きちんと分析すれば、社会の一面を明らかにすることができます。総合情報学部はとても落ち着いた環境にあり、学生たちものびのびと研究しています。ゼミ生たちには、関心のあるテーマを自由に選択してもらい、そこから社会を捉える力を養っていただけるよう、より一層注力していきます。





研究最前線

太陽光エネルギーの有効利用技術の設計

太陽光で水と酸素から過酸化水素を製造

粉末光触媒を使用し、人工光合成

環境都市工学部 福康二郎 助教



光触媒に太陽光を当てると、そのエネルギーで化学反応が促進される。大学4年次の時に、その可能性に魅せられた福康二郎助教は、いちずに研究に打ち込み、可視光線利用を可能にする光触媒素材を用いた付加価値の高い化成品製造において、世界最高レベルの効率を達成した。燃料電池の燃料としても期待される過酸化水素の、安価でクリーンな製造・貯蔵法を開発し、エネルギー・環境問題に貢献しようと研究に取り組んでいる。

可視光線も利用可能、光触媒の新世界

太陽光などの光のエネルギーを化学反応に利用し、役立つものを作る研究をされているとお聞きしています。具体的にどのような研究をされているのですか？

太陽光エネルギーを化学エネルギーに変換して貯蔵する技術は、人工光合成技術として近年注目されています。私が取り組んでいる研究の1つは、粉末の光触媒に太陽光を当て、水や酸素から過酸化水素を効率的に製造・貯蔵する研究です。

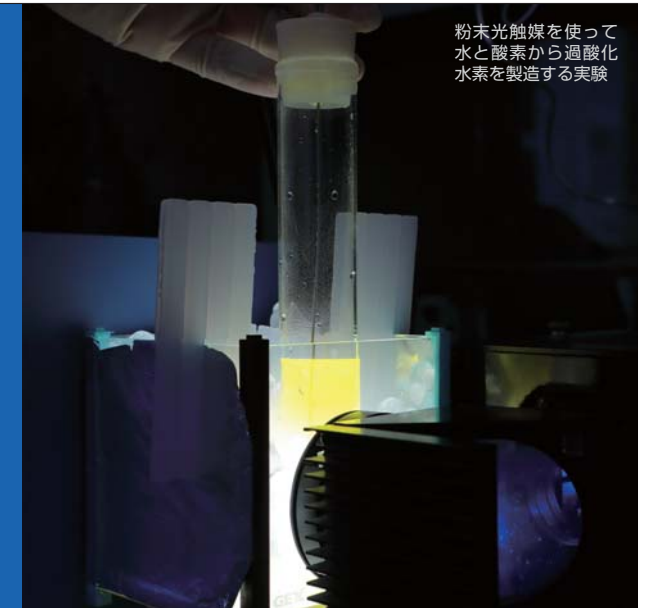
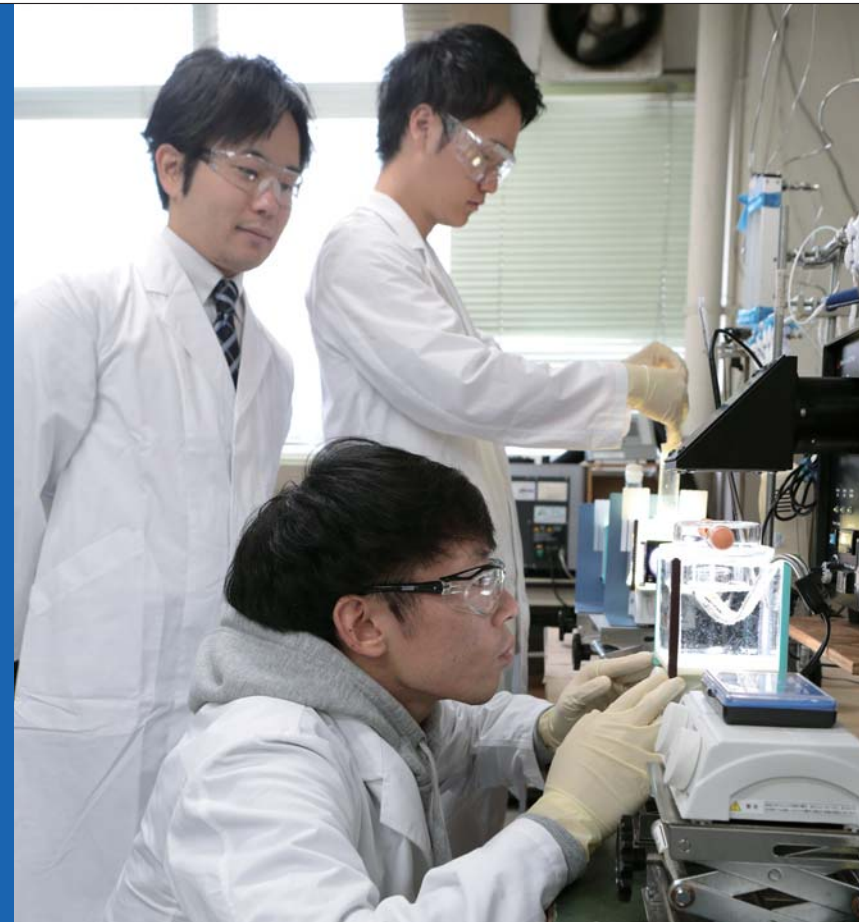
光触媒とはどのようなものですか？

光触媒は、光のエネルギーによって化学反応を促進する物質のことです。その中でも酸化チタンが既に実用化され、材料としては化粧品の中に紫外線をカットする素材として使われています。ただし、酸化チタンは紫外線にしか反応しません。紫外線は太陽光の中に5%程しかありません。もし、太陽光の大部分を占める可視光線に反応する光触媒の材料があれば、太陽光エネルギーをもっと効率良く利用できますね。

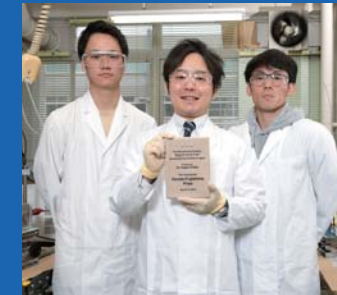
そこで目を付けたのが、既に水分解反応において高性能を示すことが知られていたバナジウム酸ビスマスBiVO<sub>4</sub>です。この物質はそんなに高価でないにもかかわらず、可視光線を良く吸収することが一番のメリットです。これを光触媒材料として使って、水から過酸化水素を作る方法を私が初めて見つけ出しました。

光触媒を使って、太陽光で水から過酸化水素を作るとは、どのような仕組みですか？

光触媒に使うのは半導体です。バナジウム酸ビスマスBiVO<sub>4</sub>も半導体です。半導体に光エネルギーを加えると、半導体の中の価電子帯というところにある電子は、光エネルギーを吸収することでより高いエネルギーを持ち、価電子帯から飛び出して、伝導帯と



粉末光触媒を使って水と酸素から過酸化水素を製造する実験



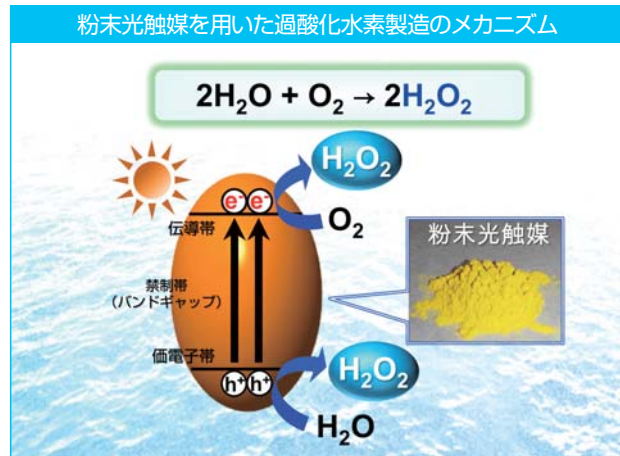
◀2018年開催の電気化学会第85回大会において受賞した「第14回 Honda-Fujishima Prize」の表彰盾を手にする福助教

Honda-Fujishima Prize：電気化学会・光電気化学研究懇談会の初代主催である本多健一氏・藤嶋昭氏の日本国際賞受賞を記念し、両氏からの寄贈をもとに光電気化学と光触媒化学の領域における若手研究者の研究を奨励する目的で創設されたもの

いうところに移動します。価電子帯には、正孔という電子が抜けた穴が発生します。この穴を使って酸化反応を起こし、水から過酸化水素を作ります。同時に伝導帯に電子を留めておけば、還元反応で酸素から過酸化水素を作ることできます。(下図)

可視光線を利用できる光触媒で太陽光エネルギーをたくさん集めて、より効率良くその反応を促進できるようになったということですね。

もう1つ、光触媒を補助して反応を促進する助触媒として、炭酸塩を使ったことがポイントです。当時は、バナジン酸ビスマスBiVO<sub>4</sub>を光触媒として、炭酸塩を助触媒に使った組み合わせと、反応を助けるため、そこに少し電気を加えるという技術展開をしたことで、世界最高水準の高い効率を達成することに成功しました。太陽光のエネルギーの内、どれだけの量を化学エネルギーに変えることができたかを示す値が、太陽光エネルギー変換効率で



2.2%を達成しました。少ないと思うかもしれませんが、藻類の光合成が3%ぐらいですから、自然界の値にかなり近づいたと言えます。

水はH<sub>2</sub>O、過酸化水素水はH<sub>2</sub>O<sub>2</sub>。酸素を1つ増やすだけだから、簡単というわけではないのですか？

非常にシンプルな反応に見えますが、過酸化水素を作るのは実はすごく難しいのです。水よりも過酸化水素の方が不安定なので、水が分解される環境なら、過酸化水素もすぐ分解されてしまいます。そこを過酸化水素の状態でもって、蓄積しなければいけない。これまで工業的には、アントラキノン法という方法で製造されていましたが、この方法は有機溶媒をたくさん使うので環境負荷が大きいし、作り出すまでに何段階も工程を経なければなりません。これに代わって、豊富に存在する水や酸素を原料に、ほぼ無限な太陽光エネルギーを使ってシンプルで安価な生成ができれば、エネルギーや環境の問題に大きな貢献ができると思います。

未来の新エネルギーを支える技術へ

今後の研究はどのように進めていくのですか？

可視光線の波長は400nm～800nmで、バナジン酸ビスマスBiVO<sub>4</sub>が拾えるのは550nm程度までなので、今は800nmまで拾える性能の高い光触媒の材料を探索しています。また、伝導帯で電子を蓄積する助触媒の良い材料も探索しています。水と酸素の両方から、過酸化水素をより効率的に作り出せるかを探究していきます。

昔から、過酸化水素はオキシドールとして、殺菌・消毒剤、あるいは半導体の洗浄などの用途に利用されてきました。最近特に、燃料電池の燃料として注目されています。水素を燃料とした場合は水が、過酸化水素を燃料とした場合は水と酸素が、燃料電

池から排出されます。私の研究は、水と酸素から過酸化水素を作るものなので、上手く循環させる仕組みを作ることができれば、究極にムダのないエネルギーの利用ができるかもしれません。

燃料電池以外の応用については、個人的にはいろいろ考えています。例えば、水を貯めて冷やす冷却塔で粉末光触媒を置いておき、太陽光が当たると過酸化水素が作られて、水を殺菌でき、藻も繁殖しない技術など。近未来的には、殺菌・消毒面の用途が、更にその先の未来には、エネルギーとしての利用があるだろうと考えています。

計画通り進まない研究こそ、画期的な成果生む

そもそも研究のきっかけは？

4年次の時に、身近にある粉が、光を当てるだけで有害物質を分解することや、エネルギーを作ることができると知り、興味を持ちました。実験を進めるうちに本当に無害化できるのだと分かり、より深く研究してみたいと思うようになりました。その時からこの研究に情熱を注いできました。

ずっと失敗続きだったら、ここまで続けられなかったかもしれません。良い発見ができた時は、学生たちと喜び合います。その時の感動を求め日々研究に励んでいます。

私は先々の計画を立てて物事を進める方ではなく、出た結果を見て、次のプランを決めるというスタイルです。計画が立てられる研究が続いている限りは、その枠から出られないのではないかと考えています。将来、光エネルギーを使って有用化成品が作られていることを社会で認知できるまで光触媒の研究を押し上げていきたい。それを30年以内に過酸化水素で達成させたいと思っています。



◎ 文部科学省「大学の世界展開力強化事業(タイプB)」に全国で唯一採択

## COIL型教育を活用した交流プログラムの構築を支援する「グローバル教育イノベーション推進機構(IIGE)」を開設



今年8月、関西大学の「グローバル・キャリアマインドを培うCOIL Plusプログラム」が、文部科学省の平成30年度「大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」に採択された。

COIL(Collaborative Online International Learning/オンライン国際協働学習)とは、ICTツールを活用しバーチャルに連携しながら、海外の学生とプロジェクト型学習を行う新しい教育実践法。このたび採択されたプログラムは、本学学生と米国の学生がCOIL方式で共に学んだ後、海外現地に赴いて就業体験や企業訪問など多彩な活動に参加し、帰国後、再びCOIL方式で共修することで、自らの将来の可能性を国境や言語、文化の壁を乗り越えて考える力を養成するというもの。

本学は2014年度から国内で唯一のCOILセンター(KU-COIL)を設置してCOIL型教育に取り組んでおり、現在、世界11カ国、



21大学のネットワークを持っている。本プログラムは、そのネットワークを基盤として進化させ、日本のCOIL型教育を推進・先導するプラットフォームとしての役割を果たすことを目指すものであり、交流推進のための基盤拠点を構築する事業が採択されたのは本学のみとなる。



11月1日には、全国のCOIL型教育実践を促進するプラットフォーム「JPN-COIL協議会」の事務局並びに学内外の交流プログラムの構築及び運営を支援する「グローバル教育イノベーション推進機構(IIGE: Institute for Innovative Global Education)」を開設。国内外の高等教育機関と連携し、互いの教育リソースを活用することで相乗効果を生み出すような、新しい国際教育モデルを提唱する。近未来に地球規模で活躍する人材の育成への寄与が期待されている。

◎ 日本・EU国際研究ワークショップ2018開催

## KMP 関大メディカルポリマーを活用し、未来医療を牽引する



11月5日、関西大学日本・EU研究センターが設置されているベルギーのルーヴェン大学にて「日本・EU国際研究ワークショップ2018」が開催された。

当日は、2016年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に選定された「『人に届く』関大メディカルポリマーによる未来医療の創出」(KU-SMART PROJECT)から、プロジェクトメンバーが講演を行った。本学からは化学生命工学部の大矢裕一教授、宮田隆志教授、柿木佐知朗准教授、またルーヴェン大学からは医学部のLieven Thorrez准教授が登壇。「生分解性高分子を用いたドラッグデリバリーシステム」など、最新の研究紹介を通じて、医療分野における本学の「ものづくり」の存在感を示した。

◀ルーヴェン大学でプロジェクトの説明をする大矢裕一教授

◎ 広告会社キーパーソンによるパネルディスカッションを開催

## 広告業界の無限の挑戦

11月16日、「広告会社キーパーソンによるパネルディスカッション」が梅田キャンパスで開催された。

大手広告会社が垣根を越えて集結したこのイベントは、マスコミ業界で活躍する関西大学OB・OG組織「関西大学マスコミ人会」の協力により実現。学生の進路選択や幅広い社会的見識の向上に資することを目的に開催され、広告業界に関心を持つ関西大学学生をはじめ、広告業界関係者ら約120人が出席した。



当日は、大広、電通、博報堂から、それぞれ異なる経歴を持つパネリストが登壇。社会学部の黒田勇教授がコーディネーターを務め、インターネットの急速な普及とデジタル化、市場の多様化に伴い、刻々と変化し、拡大していく広告業界において、パネリストがそれぞれの立場から、自社の取組みや具体的事例を交えながら、活発な議論が交わされた。

パネルディスカッション後の質疑応答では、広告業界でのやりがいや広告媒体のこれからについて、学生達から次々とあがる質問に対し、パネリストが一つ一つ丁寧に回答し、盛会のうちに終了した。

—あなたが居て、はじまる学園祭—

● 第41回関西大学統一学園祭を開催

2018年度の関西大学統一学園祭が、11月1日～4日、千里山キャンパスで開催された。今年のテーマは「Join us!!!—あなたが居てはじまる学園祭—」。

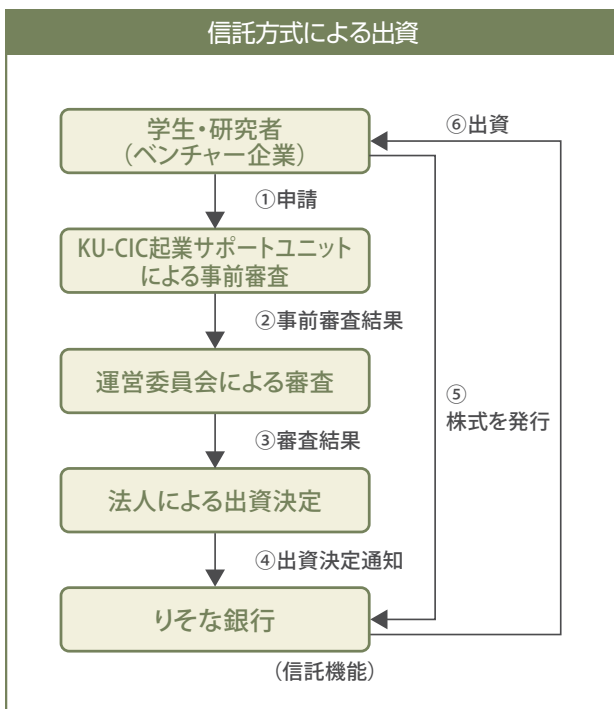
第41回を迎えた今年は、昨年を上回る10万人が来場。サークルやゼミ等による194もの模擬店やフリーマーケットをはじめ、研究発表やステージ企画、講演会等、さまざまなイベントや催しでにぎわいを見せた。1日にはアキナやスーパーマドーナ、吉田たちらがお笑いライブを披露。2日にはKEYTALKとキュウソネコカミを迎えてのライブ演奏、4日にはベッキーによるトークショーも開催され、連日、会場は熱気に包まれた。更に、統一企画構成委員会が運営する毎年恒例の目玉企画「K.U.ROCK FEVER 16th」、「Kandai Dance Festival2018」、「お笑い王決定戦」も行われ、観客も巻き込みながら圧巻のパフォーマンスが繰り広げられた。4日の夕方には、心響地をコンセプトとする「後夜祭」が悠久の庭にて開催され、約2,000人が結集して感動のフィナーレを迎えた。



■社会貢献・連携事業

◎ 関西大学独自の起業資金支援制度を設立

## りそな銀行と提携し、学生の起業資金を援助する



## Venture Support

関西大学は今年9月、学生の起業精神の醸成及び研究活動の事業化推進を目的に、ベンチャー企業の支援スキームに起業時の必要資金などの資金支援を行う「関西大学起業資金支援制度」を設立した。

本制度は、関西大学が起業支援の取り組みとして推進している「ベンチャー育成プラットフォーム」の重要な支援の1つであり、関西大学の学生及び専任教員を対象に、起業の「シーズ段階」から「アーリー段階」のベンチャー企業に対し、信託方式で起業支援資金を提供するという独自のスタイル。産学連携協定を結びりそな銀行の協力を得て、起業資金の支援方法について検討し、新たに設置する「新事業創出支援引当特定資産」を信託方式で運用する。これにより、ベンチャーキャピタルを置くことに比べ、資金管理に要する経費を大幅に軽減することも可能となった。

今後は、年2回程度、新たな起業モデルを発掘すべく、ビジネスプランコンテストなどを開催し、持続的なプラットフォームの実装を具現化していく。

◎ 関西大学協賛の「大阪マラソン2018」開催

## 今年も関大生約700人が大活躍

11月25日、今年で8回目となる「大阪マラソン2018」(大阪府・大阪市・一般財団法人大阪陸上競技協会主催)が開催された。沿道には130万人もの人々が詰めかけ、約32,000人のランナーに熱いエールを送った。

関西大学は第1回大会からオフィシャルスポンサーとして大会運営に協力し、地元「大阪」を盛り上げてきた。今大会も、ランナー40人をはじめ、給水、チャリティ募金、語学対応、清掃、力持ちなど、多くの学生と教職員がボランティアとして参加。沿道では「ランナー盛り上げ隊！」として、応援団、JAZZ研究会、ダブルダッチサークル「Mix Package」、フラダンスサークル「coco girl」、カイザーズ・キッズチアなどが熱く楽しい応援パフォーマンスを繰り広げ、大会に彩りを添えた。

また、23日、24日にはインテックス大阪で「大阪マラソンEXPO 2018」が開催され、「地域・産学連携」をテーマに関西大学ブースを出展。人間健康学部の河端隆志教授と小田伸午教授のゼミが「ランニングフォームクリニック」を開催し、人間の構造的特徴に基づいた理想的な走行フォームなどについて解説・指導した。他にも、社会学部の黒田勇教授のゼミが、大阪天満宮とハタ鉱泉株式会社と本学による聖産学連携商品「ご当地梅サイダー」[UME・TEMMA]の試飲・販売会を行うなど、日頃の研究成果を披露した。



みんなでかける虹。 OSAKA 2018 MARATHON

1 沿道でエールを送る応援団 2 給水ボランティア 3 語学対応ボランティア  
4 チャリティ募金ボランティア 5 ランニングフォームクリニック 6 UME・TEMMA販売会

◎ 関西大学・明治大学 TV番組公開シンポジウム

## 「留学生に未来を託して～NEOリーダー育成へ挑む大学～」



10月22日、関西大学と明治大学は、「留学」をテーマにした公開シンポジウム「留学生に未来を託して～NEOリーダー育成へ挑む大学～」を明治大学駿河台キャンパスにて開催した。

関西大学と明治大学は、2017年9月、相互の教育・研究の一層の進展ならびに産学連携や地域社会への貢献活動、国際学術交流活動等の推進を通じ、地域・国際社会の発展に寄与することに合意し、法政大学を加えた3大学間で連携協力協定を締結した。本イベントはその活動の一環で、留学に力を入れる両大学が、日本人の海外留学促進及び海外からの受入れ留学生の増加に資するものとなることを目的とする。

当日は、文部科学省「トビタテ!留学JAPAN」プロジェクトディレクターの船橋力氏をコーディネーターに迎え、両大学の学長が海外留学を目指す学生を増やすための自校のさまざまな取り組みを紹介。グローバル人材育成に向けて必要なことを提唱した。その他、タレントの関根麻里氏が豊富な海外・留学経験について語り、「これから日本が海外を目指す留学生を増やすために必要なもの」、「国内外の企業から求められる国際人の育成に必要なもの」について、学生の意見を交えながらの熱い議論も展開された。

なお、本シンポジウムは会場と関西大学とをライブ中継で双方向に接続して行われ、その模様は2019年3月(予定)にNHK(Eテレ)「TVシンポジウム」で放映される。

◎ 第38回「地方の時代」映像祭2018を開催

## 「地域・地方だからこそ伝えられること」を映像で発信

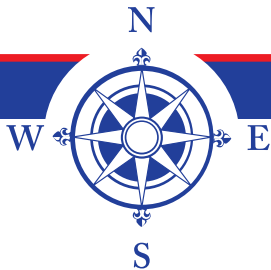


関西大学、吹田市、日本放送協会、日本民間放送連盟、日本ケーブルテレビ連盟が共同主催する第38回「地方の時代」映像祭2018が、11月10日～16日、千里山キャンパス及び梅田キャンパスにて開催された。

今年は293作品の応募があり、34作品が各部門賞を受賞。10日に千里山キャンパスで贈賞式、記念講演、グランプリ作品上映、シンポジウムが行われ、11日～16日にかけてワークショップ、受賞作品上映会、参加作品上映会などが開かれた。

グランプリ受賞作品は、沖縄テレビが制作した沖縄の現状を追ったドキュメンタリー『菜の花の沖縄日記』が選ばれた。関西大学からは「市民・学生・自治体部門」で入賞作品として選ばれた総合情報学部・岡田朋之教授ゼミ『「妹と私」みき演劇セミナーでの5ヶ月』が優秀賞、社会学部・里見繁教授ゼミ『2つの性に縛られて Xを選びたい私たち』が奨励賞、黒田勇教授ゼミ『ひろばを追え!!～歴史から消えたゾウ～』が奨励賞を受賞した。





### 武庫川女子大学と包括連携協定を締結



▲調印式で握手を交わす芝井敬司 関西大学学長(左)と瀬口和義 武庫川女子大学学長

関西大学と武庫川女子大学は、これまでのさまざまな連携、交流をさらに活発に推進することを目的に、包括連携協定を締結することに合意。11月28日、梅田キャンパスで調印式を挙行了。

本協定により、両大学の理念と特色を生かし、相互の教育・研究活動の一層の充実と質の向上を図るとともに、産学・地域連携やスポーツ交流など、さまざまな活動を積極的に推進。学術の発展と有為な人材の育成に寄与する。今後は、武庫川女子大学の「保育士試験対策特別講座」について、受講対象を本学学生にまで広げることを皮切りに、将来的には各種資格取得のための連携プログラムの開講、施設の相互利用、学生交流などを目指す。

### 特別公開シンポジウム「関西大学でも、そこまで言って委員会 NP」を開催



10月27日、読売テレビの人気番組「そこまで言って委員会 NP」が初めてスタジオを飛び出し、特別公開シンポジウム「関西大学でも、そこまで言って委員会～日本の安全は大丈夫!? 防災総点検SP～」を千里山キャンパスで開催した。

当日は、長谷川幸洋氏、須田慎一郎氏、萩谷麻衣子氏、丸田佳奈氏の他、本学からは社会安全学部の永松伸吾教授、林能成教授、奥村与志弘准教授、小山倫史准教授がパネリストとして登壇。災害時の減災や災害への心構えについて議論が交わされ、約1,000人の来場者が熱心に耳を傾けた。高橋智幸社会安全学部長がシンポジウムを総括し、会場が熱気に包まれたまま閉会した。

### ISUグランプリシリーズ・スケートアメリカで宮原知子さんが狂巻の2連覇！ グランプリファイナル進出！



(写真提供：関大スポーツ編集部)

10月19日～21日、フィギュアスケートISUグランプリシリーズ第1戦がアメリカ・エバレットで開催され、体育会アイススケート部の宮原知子さん(文3)が優勝し、2連覇を果たした。

更に11月9日～11日、広島県で開催されたISUグランプリシリーズNHK杯国際フィギュアスケート競技大会では、宮原さんが2位、関西大学カイザーズフィギュアスケートクラブ所属の紀平梨花さんが優勝した。この結果、宮原さんは12月6日(木)～9日(日)にカナダ・バンクーバーで開催のISUグランプリファイナルへの進出を決めた。

### 卒業生が大活躍！ アジア競技大会で清水希容さんが金 アジアパラ競技大会で和田伸也さんが銀



▲空手女子個人形で大会2連覇を達成 (写真提供：JKFan)



▲金メダルを手に笑顔の清水さん



©2018日本パラ陸上競技連盟

8月18日～9月2日、インドネシア・ジャカルタで開催されたアジア競技大会2018において、空手女子個人形で卒業生の清水希容さん(ミキハウス)が、2014年韓国・仁川大会に続いて金メダルを獲得し、大会2連覇を成し遂げた。

また、10月6日～13日に開催されたアジアパラ競技大会2018では、陸上男子T11(全盲クラス)1500m、5000mの両種目で、卒業生の和田伸也さん(長瀬産業株式会社)が銀メダルを獲得。両選手には、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会でも熱い期待が寄せられている。